

痛みの10年

南 敏 明



米国議会は新世紀の始まる2001年1月1日からの10年を「痛みの10年 (The Decade of Pain Control and Research)」とし、痛みに対する診療・研究・教育を発展させることを宣言した。最近、「Nature」、「Science」誌に続々と痛みのメカニズムに関する論文が掲載されている。

痛みは、針で皮膚を刺した時などの侵害性の痛み、炎症による痛み、神経損傷・虚血による痛みに大きく分類され、心因性の痛みも存在する。針で皮膚を刺した時の痛みは、鋭い痛みであるが時間経過と共に軽減していく。炎症による痛みは病気に対する有用な警告反応であり、ロキソニン®やボルタレン®をはじめとする非ステロイド性消炎鎮痛薬やモルヒネ等の麻薬でコントロール可能である。しかし、帯状疱疹後神経痛、骨折や打撲の後、骨折や傷が完治しているのに痛みが持続する反射性交感神経性萎縮症、脊髄損傷後の痛み、脳出血・脳梗塞後の中枢痛、癌性疼痛、エイズの痛みなど、神経の痛みは痛み自体が有害な病態をもたらす。例えば、一時間正座した後、脚を伸ばすと何とも言えない不快な感覚が出現するが、時間と共に消失する。しかし、神経損傷や虚血による痛みは、正座した後の何とも言えない不快な感覚の増強したものがいつ終わるとなく続く。これを逆に利用したのが昔の拷問で、神経を虚血にすることにより痛みを引き起こしていた。針で皮膚を刺した時などの侵害性の痛みは、内因性オピオイド（麻薬）が放出され次第と痛みが和らぐが（これを利用したのが鍼灸治療であるが）、神経損傷や虚血による痛みは、非ステロイド性消炎鎮痛薬や麻薬に抵抗を示すため内因性モルヒネも効果がない。例えば、毎日同じことを繰り返し行くと自然と身体で憶えるのと同様に、痛みが持続すると脊髄や脳で痛みが記憶され、さらに痛みが増強される。

神経損傷や虚血による痛みは、難治性のものが非常に多く、欧米では全人口の約1-1.5%が神経に起因する痛みを冒されている。さらに腰痛、膝痛等を含め慢性に経過し、強い痛みを有している人は全米成人の9%を占め、アメリカにおける痛みによる労働生産力の損失は、年間650億ドル（約7兆円）以上と推計されている（Chronic Pain in America: Roadblocks to Reliefより）。

痛みには個人差があり定量性に欠けるという点が、痛みの研究や治療を困難にしている。高血圧症のコントロールは血圧測定で、糖尿病は血糖値やHbA1cで、一部の腫瘍では腫瘍マーカーが存在する。痛みは、患者の顔の表情やvisual analogue scale（100mmの直線の左端を全く痛みのない状態、右端を想像を絶する痛みとし現在の痛みを直線上に印を付けてもらう）で測定しているが、痛みの強度を客観的に評価する方法が全くないのが現状である。今までは、痛みそのもので死に至ることがなかったため研究対象としてはマイナーであったが、慢性痛が社会経済に莫大な損出をもたらしていること、痛みのコントロールはQOL（quality of life）の改善に欠かせないこと等に、「痛みの10年」で痛み研究が非常に注目されている。

紀元前400年、ヒポクラテスはヤナギの樹皮（ヤナギの樹皮にアスピリンが含まれている）を発熱や痛みの治療に用い、1897年にアスピリンが合成され、現在年間5万トンのアスピリンが消費されている。ケシの実から精製されたモルヒネとヤナギの樹皮からのアスピリンが、現在も鎮痛薬のトップであり、アスピリンやモルヒネを超える鎮痛薬はない。今後、アスピリンやモルヒネが効かない痛みのメカニズムを解明し、アスピリンを超えるスーパーアスピリンを創ることを目標に研究を発展させようと考えている。

痛みを我慢していませんか？放っておくと、大変な事になりますよ…！

（みなみ・としあき 麻酔科学教授）

「春を食す」

岡田 仁 克

先日リチャード・ミッチェル先生と大阪で会食する機会があった。ミッチェル先生は病理学の教科書（Robbins Pathologic Basis of Diseases）の分担執筆者の一人であり、ハーバード大学医学部の病理学コースのカリキュラム策定もされている。研究面でも多くの業績をあげておられる素晴らしい病理学者である。和食が好きだとのことで、割烹料理屋さんのこじんまりとした和室で小宴会を催した。あれこれと出てくる季節感たっぷりの料理をひとつひとつ英語でうまく説明できないので、「すべて季節物で、日本では我々は季節を食べるのだ」と十把一絡げにして説明すると、ミッチェル先生は妙に納得し、季節を食べるといふ言い方を気に入ってくれたようであった。

昔から日本人は季節の旬の食材を好んで食してきた。春が旬の食材といえば様々な魚介類や春野菜を挙げるができるが、山菜を外す訳には行かない。

野草図鑑をひも解いてみると実に多くの山菜が調理法と共に載っている。多くは薬草でもあるらしい。それならば野趣溢れる山菜を季節の訪れと共に食してみたいと思うのが人情ではないか。いや日本人ならそう思うはずである。

幸運なことについて先日私には春の山菜を食する機会があった。石川県の山寺で毎年五月初旬に山菜研究会なる会が催される。研究会と言っても、平たく言えば山菜テンプラパーティーである。参加は無料で、あくまでご住職ご一家との親睦を深めるのが目的である。なんだかゴールデンウィーク中の楽しい思い出をひけらかしているようで申し訳ない気もするが、この山菜研究会についてご紹介させていただく。

元々はこの山寺のご住職が始められた会で、今年で22回を重ねる。山寺の名前と住所についてはご勘弁願いたい。300年ほどの歴史を有する山寺で、本堂は広くご本尊様も大変立派である。参集するのはご近所様で、私はたまたまご住職のご子息の知り合いという理由で参加させていただいた。多くは気心の知れた連中なので、ビールやお酒も出る。さすがに本堂でははばかれるので、離れに移動して宴会開始である。

この会は、今ではご住職のご子息達によって運営されている。銀行勤めのご長男はあらかじめ準備を万端に整えられるし、版画家である次男の方はいつもメニュー代りの山菜のスケッチを作成される。これがまた味がある。ぜひご覧になっていただきたい（図参照）。

これによると今回はミツバ、コシアブラ、フキ、ハマボウフウ、コゴミ、サンショウ、ギボウシ、タラノメ、アケビ、カタハ、ワラビ、ウド、モミジガサ、セリ、シイタケ、タケノコ、柿の新芽、茶の芽が採り集められている。確かこれら以外にもユキノシタがあったように記憶している。これらを片っ端からテンプラにして食す。

山菜は独特の苦味があるのが特徴である。それぞれに程度は異なるが、多少ともこの苦味を感じると、ああ春だなあという気になる。この苦味はアルカロイドであると言う人もいればポリフェノールだと言う人もいる。本当のところは知らないが、おそらくどちらも関係あるのだろう。山菜でもテンプラにすると結構お腹にこたえる。もう皆さんの箸が進まなくなると手打ち蕎麦が出た。いたれりつくせりであった。

来年は参加できるかどうか解らないが是非ともまた参加したくなる。この会はおいしい山菜だけでなく、ご住職ご一家の暖かいおもてなしと、参加する人々の人柄の良さで長続きしているのだと思う。居心地がよいのである。

やはりホスピタリティーが重要なんだなと、春の山菜の苦味を噛み締めながら、つくづく思い知ったのであった。



（おかだ・よしかつ 第2病理学助教授）

迫り来る「巨大地震」に備える ―21世紀の医療環境(17)―

牧 彰

昨年末の「スマトラ沖大地震」、何とも凄惨でしたよね！まさに、《災いに明け暮れた2004年》を締めくくる「衝撃的な大津波」でした。

また、今年3月の「福岡県西方沖地震」、これにも驚かされました。本来、予測もしなかった地域での「大地震」発生ですから尚更です。これは、日本のメディアはあまり報道しなかったことなのですが、対岸の釜山辺りでもかなり罹災した模様です。地震のない韓国での「不慮の震災」ですから、彼の国の人たちもさぞかし肝を潰されたことでしょう。

そういえば、10年前の「阪神・淡路大震災」も、私たち関西人には全く「寝耳に水」の大災害でした。これによって、「地震のない関西」の言い伝え？が脆くも崩れ去ったのでした。また、日本の先進的耐震技術への信頼失墜なども、先の敗戦以来の大衝撃でしたよね。



阪神・淡路大震災を教訓とした「赤穂市民病院」

目下、日本列島に縦横無尽に張り巡らされつつある新幹線・高速道路などは、本当に必要不可欠なのでしょうか？また、その「防災対策は万全である」といい切れるのでしょうか？高架上は地表面のおよそ2倍の激震に晒されることになります。時速300kmの超高速で突っ走る新幹線が、巨大地震発生時にどうして脱線しないといえるのでしょうか？産業・経済重視が名分の人命最軽視も甚だしい愚策の責任は、一体誰に負えというのでしょうか？決して広くない国土の貴重な自然や文化財を闇雲に破壊し続けて、これ以上日本列島を改造する必要性が何処にあるのでしょうか？

昔から「地震・雷・火事・親父」といわれてきました。今では親父は大分下落してしまいましたが、大地震は昔から常に恐ろしい事象の筆頭でした。環太平洋地震帯にある日本列島は4

枚のプレートが犇めき合う他に類のない地震の巣窟であり、世界の地震のおよそ10%が日本周辺で発生しています。日本は国土こそ広くないが、世にも稀な「超地震大国」なのです。しかし、「揺れ動く大地は、地球が活きている証」であり、「人類を含む全ての生き物は、この大自然の生命力に活かされている」のです。

多くの地震学者は、前世紀末から今世紀半ばにかけて「日本列島は、再び地震の活動期に入った」と真摯に警鐘を鳴らしています。また、戦後の日本経済の驚異的復興は、たまたま「前世紀後半が地震の静穏期にあった」ことに因ると唱える経済学者もいます。一般に「災害は進化する」といわれています。死者数14万人を超える「関東大震災」級の大地震が首都圏を直撃していたら、その人的・経済的損失は、さぞかし計り知れなかったことでしょう。

西日本では、今世紀前半に「南海地震」・「東南海地震」・「東海地震」が極めて高い確率で予測されています。「兵庫県南部地震（1995年）」や「鳥取県西部地震（2000年）」・「芸予地震（2001年）」、そして、「福岡県西方沖地震（2005年）」などの活断層による内陸型地震は、今世紀前半には発生するであろうプレート移動による海洋型「巨大地震」の前兆ともいわれているのです。

日本の医療施設は、刻々と着実に迫り来るこの「巨大地震」に対して、先の「阪神・淡路大震災」に学び、その教訓を十分活かした対応をしているのでしょうか。

「新耐震設計法（1981年）」施行以前の既存施設は、「耐震診断・耐震補強」が施されたのでしょうか？新たに増設する場合の免震・制震構造の採用や地盤の液化化対策などの「耐震工法」は検討されたのでしょうか？二次災害の火災時に、自力で避難困難な患者のための「立て籠もり対策（病室の防火区画化）」はされたのでしょうか？「救助・消火活動の空間や設備」は十分でしょうか？地域の防災拠点として、電気・上下水道・ガス・通信などの「ライフラインの確保（自家発電容量・飲料水の備蓄など）」はどうでしょうか？大地震発生時には、さながら野戦病院化することを想定して、「ロビー・待合室・講堂などに応急的医療設備」が備わっているのでしょうか？

また弱者（患者）と健常者（医療従事者）が共存する社会の縮図・病院は、独自の「防災・避難訓練」や「防災グッズの備蓄」を定常的にしているのでしょうか？

（まき・あきら 建築家 元日建設社員 本学総合研究棟・本館図書館棟設計担当）

読書へのある開眼？

三輪田 隆 子

読書とは辞書によれば「教養のために書物を読むこと」とある。私の場合は、本来の読書のあり様ではなく、単に本を見ながら心身ともに休息するという状態である。それぐらい手軽なものと捉えているので、本屋さんに行っても専門書や文学作品には目もくれず、もっぱら松本清張の文庫本を漁り、新しいタイトルに巡り合うと、一も二もなく買ってしまふ。清張の推理物は単にストーリーの面白さだけでなく、主人公の心の機微と共に、その時代の社会背景を鋭く追及したり、あるいは俳句・和歌や地域の行事など、綿密に調べ上げたことが行間から窺える。本来の読書ができていない私にとって、幅広い視点から結構楽しむことができる。しかし清張氏没後何年になるか定かではないが、最近ではほとんどを読み尽くしたため、当然ではあるが新しい作品に出会うこともなく、本のページをめくる時の、あのわくわくした気持ちから長く遠ざかっているようで寂しい思いをしていた。

そんなある日、知人から厚めの本を手渡された。それは池宮彰一郎著の「平家」上中下巻であった。題字は筆太に書かれた空海の筆になるものだそうで、それに見合うかのような装画は、(財)林原美術館蔵の平家物語絵巻の一場面である。その方面では無知な私からしても、さぞかし由緒あるものと想像できる。この重みが災いしてかこの本には何とはなく馴染めないままに、本棚の隅に追いやられた状態で時が経過していた。

ある時、探し物をしていた私の視野に、その重々しい絵が再び飛び込んできた。同時に親切に薦めてくれた知人の顔が浮かんできた。忘れかけていたことへの私の気持ちがプレッシャーとなり、まるで本に「早く早く」と責め立てられているようで、思わず上巻の表紙を捲っている私があった。

第一章兵乱発起「今を去ること840年の昔。……時は平治元年12月厳寒の候……」冒頭の文章である。平安期の末期に当たり、遙か遠い年月である。もともと歴史に興味はあったが、この一文はそれまでの眠った私の脳を刺激したように感じた。794年桓武天皇が都を定めて以来400年。奈良・平安時代が終わろうとする最後の33年前にこの物語は始まっている。そして、公家から武士へと実権が移り、鎌倉幕府へと引き継がれて時代が動いていく。その時代の中で大河の流れに沿うように生きていく人々の栄枯盛衰の物語である。そういえば今年のNHKの大河ドラマは「義経」である。もちろん作風も異なり同じにはできないが、時代に翻弄されながらも一生懸命生きる主人公の姿が心に迫ってくる。そこには時代を超えて現代にも通じるものがあるからであろう。まだページをめくったばかりの「平家」の継続に闘志を燃やし、あの美しい「義経」の映像とダブらせながら、古のスペクタクルに思いを走らせた。

今までは気分転換を兼ねて勢いで読みふけてきた本が多かった。けれども「平家」と触れ、その荒々しい表現にもかかわらず、なぜか彩りを持って、私の殺風景な生活の中に本が入ってきたようで、初春に花の便りを待ち焦がれるような気分である。

私は文章としては平易でシンプルな表現が好きである。その隠された中にこそ、作者の情熱が伝わってくると思っている。しかし読書三到といわれるように、これを機会にじっくりと「平家」を味わってみたい。この年齢での読書開眼？この際人の思惑は気にしない。ともかく、複雑に絡み合う人間模様と時代背景を紐解きながら読破するまでに、これから先まだまだ時間がかかりそうである。知人には早速お詫びと共に、猶予期間の延長願いを出しておこう。



(みわた・たかこ 看護専門学校教員)

SCOPUSを導入

2005年4月から新しいデータベース「Scopus」が利用できるようになりました。その概要を紹介いたします。

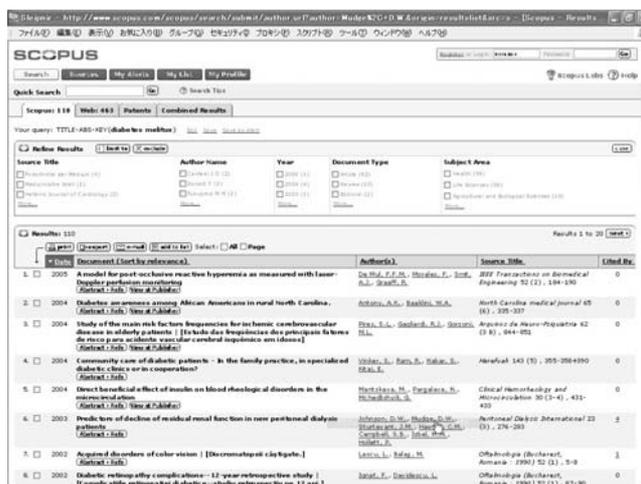
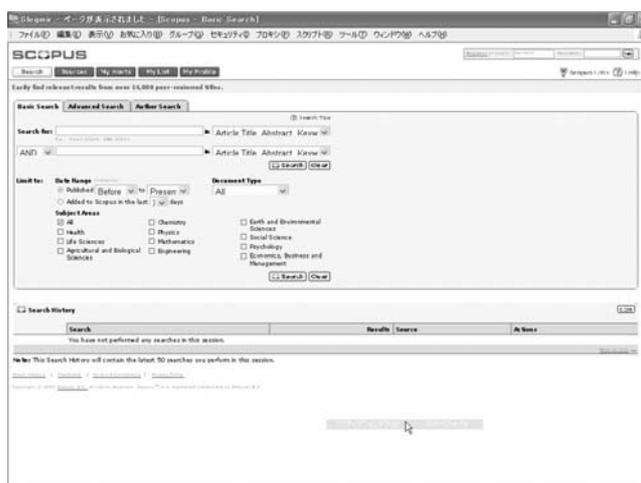
「Scopus」はElsevier社が提供する学術情報ナビゲーションツールで、4,000以上の出版社から出版される14,000以上の科学・技術・医学・社会科学のタイトルを網羅する抄録・索引データベースです。データは毎日更新され、抄録は最も古いものは1966年まで遡ります。1996年以降に出版された論文には参考文献が付いています。分野別の収録タイトル数では、Life Sciences分野で1,600タイトル以上のジャーナルが収録されています。

「Scopus」の利用は、図書館ホームページの「5.文献情報検索」から「Scopus」を選択してください。最初に表示されるのは基本検索画面です。ここでは、検索対象とするフィールドを選択できます。デフォルトは、Article Title、Abstract、Keywordsです。その他の検索フィールドでは、Authors等が選択できます。また、Journalsを選択するとジャーナルリストをタイトルまたは分野でブラウズすることができます。

検索結果の一覧は、「Scopus」タブでジャーナルの検索結果、「Web」タブで「Scirus（科学専用インターネット検索エンジン）」の検索結果、「Patents」タブで特許関係の検索結果、「Combined Results」タブで各検索結果を合わせたものが表示されます。

個々の文献は、論題・著者・ジャーナル名・巻号数・ページ数が表示されます。「Abstract + Refs」をクリックするとその論文の詳細表示を行います。詳細表示画面では、先の項目に加えて、抄録・著者キーワード・参考文献（各文献ごとに詳細表示が可能）・その論文を引用している論文リスト等が表示されます。

「Scopus」は利用の仕方によって、有用なツールとなりますので、十二分にご利用いただくようお願いします。



メディカルオンラインについて

2005年4月から新たに「メディカルオンライン」が利用できるようになりました。その概要を紹介いたします。

「メディカルオンライン」は株式会社メテオインターゲートが提供する会員制医療専門総合Webサイトです。日本の学会誌、学術専門雑誌の文献検索、アブストラクト閲覧、文献PDFの全文ダウンロードが利用できます。

「メディカルオンライン」の利用は、図書館ホームページの「5.文献情報検索」から「メディカルオンライン」を選択してください。

「メディカルオンライン」のホームページには、新着ジャーナル情報やバックナンバー追加更新情報も掲載されています。文献検索は、ホームページ上部にある「キーワード検索」タブを選択すると、タイトル名、ジャーナル名、著者名、症例、キーワードなどフリーキーワードで全文検索することができます。雑誌名から検索する場合は、「バックナンバー」タブを選択すると雑誌一覧から、「分野別」タブを選択すると主題分野から、「配信学会・出版社一覧」タブを選択すると各学会・出版社別に雑誌を選択することができます。

検索結果の一覧表示画面では、文献のタイトル・著者名・著者所属・雑誌名・巻・号・ページ数・発行年が表示されます。[アブストラクト]をクリックすると文献の抄録が表示されます。ここで文献を選んで表示させるとアブストラクトを見ることができます。[全文ダウンロード]を選ぶとPDFファイルをダウンロードすることができます。

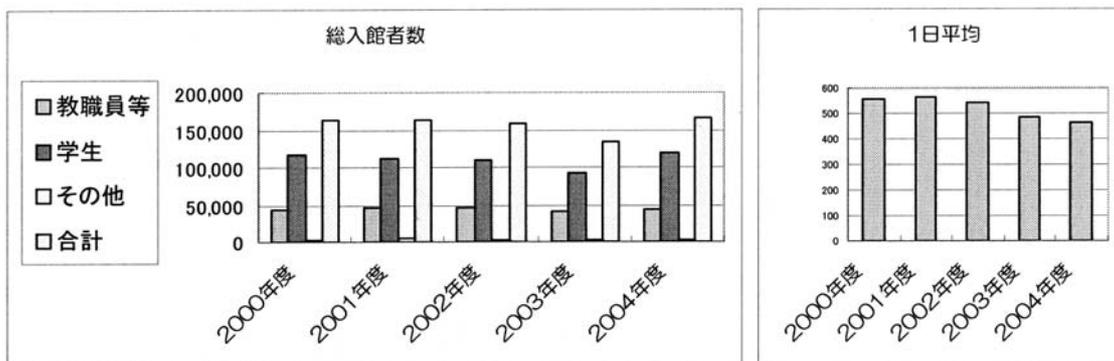
「メディカルオンライン」は平成18年3月までの年間ダウンロード件数が480件までの契約となっています。アブストラクトの表示はカウントされません。大いにご利用いただきたいと思います。ダウンロード件数が480件を超えすとダウンロードできなくなりますのでご注意ください。



図書館利用状況

(2000年度～2004年度の推移)

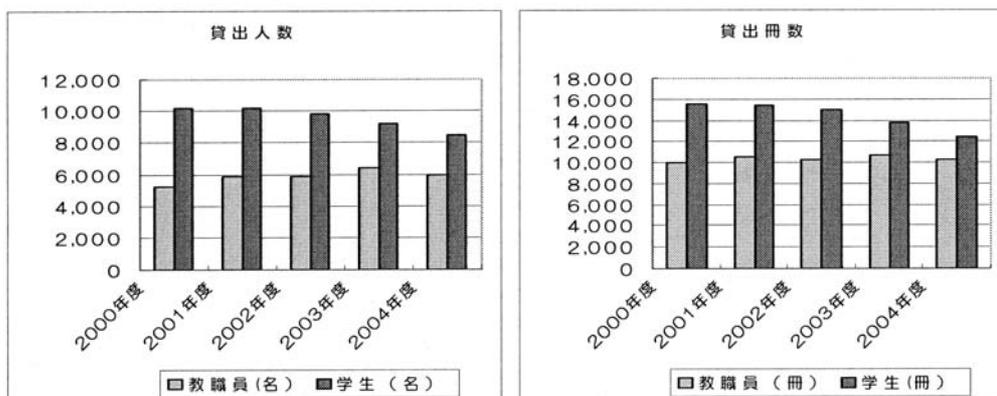
1. 入館者数



	教職員等	学 生	その他	合 計	1日平均
2000年度	43,180	116,293	3,299	162,772	559
2001年度	47,264	111,268	3,728	162,260	561
2002年度	45,423	110,370	2,133	157,926	545
2003年度	40,635	92,943	1,678	135,256	488
2004年度	45,052	118,772	1,723	165,547	464

入館者数計測システムが計測した入館者数の5年間の推移です。2003年度には8月下旬から10月にかけてシステムが不調をきたし、カウントができませんでした。また、この年には無人開館が始まり、開館時間がふえました。これらのことから、単純な比較はできませんが、入館者数は増加していると言えます。1日平均の人数が減っているのは、日・祝日も開館するようになって、開館日数が増えたためです。

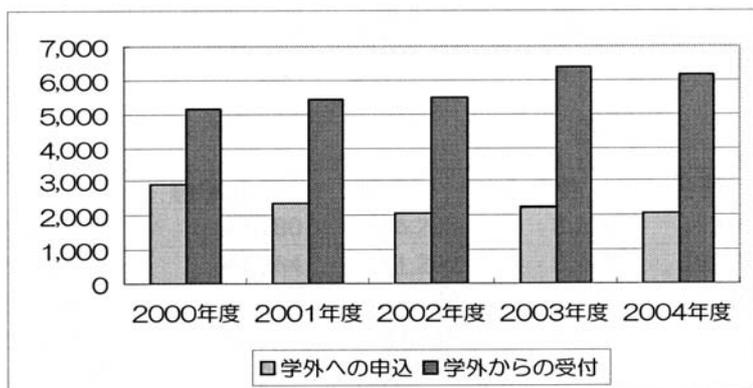
2. 貸し出し



	教職員(名)	教職員(冊)	学 生(名)	学 生(冊)
2000年度	5,273	9,955	10,205	15,556
2001年度	5,864	10,561	10,168	15,422
2002年度	5,886	10,285	9,816	14,961
2003年度	6,367	10,724	9,179	13,809
2004年度	5,992	10,287	8,439	12,478

前年少し増加した教職員への貸し出しも、今年度はまた減少しました。オンラインジャーナルの利用が多くなっていることが要因の一つと考えられます。そして、学生は相変わらずの減少。しかも今年度は、前年度と比べて10%の減少です。前年度がその前の年度の8%減だったのと比べて、減少幅が大きくなりました。これもインターネット上で手軽に情報が入手できるようになっているからだと思われます。

3. 相互貸借



	学外への申込	学外からの受付
2000年度	2,890	5,144
2001年度	2,375	5,438
2002年度	2,066	5,480
2003年度	2,248	6,385
2004年度	2,074	6,135

申込・受付とも減少しました。貸し出しの場合と同じく、インターネット上でいろいろな情報が入手できるようになったことが、要因の一つだと思われますが、今後この傾向はどのように推移していくのか注目したいと思います。

他大学図書館訪問記 (21)

独立行政法人理化学研究所 神戸研究所 発生・再生科学総合研究センター図書館の巻



研究棟C外観

独立行政法人理化学研究所は、自然科学に関する総合研究所として物理学・工学・化学・生物学・医科学などの分野で、基礎から応用まで研究を行い、その成果を社会に普及する活動を行っています。組織構成としては埼玉県和光市に本部機能にあたる本所と和光研究所を置き、その他国内8ヶ所に研究所や分所を、海外3ヶ所に支所・研究センターを置いています。

今回訪問した神戸研究所発生・再生科学総合研究センターは、神戸市の南の海上に造られた人工島ポートアイランドの南部にあります。この地域一帯は神戸市の神戸医療産業都市構想に基づき、理化学研究所のほかに、神戸市を中心に創立された先端医療財団の運営する先端医療センターや臨床情報研究センターがあり、また産学連携を目指して設立されたバイオインキュベーション施設に約60社が進出しています。このような環境の中で、理化学研究所は2000年4月発生・再生科学総合研究センター（以下CDB）を設立、2005年現在約550名を抱える施設となりました。CDBは生物の発生現象の基礎研究を中心に行っています。医療現場への実際の応用等は、先端医療センターと連携して先端医療センターにて行われており、またベンチャー企業との共同研究も行われています。

理化学研究所では和光の本所に図書館、脳科学総合研究センター（BSI）に情報センター図書室、横浜研究所とCDBにそれぞれ図書室を置いています。CDBでは開設当初はLAN経由で理化学研究所図書館を利用されていました。2001年10月に研究者の要望から図書室準備を始め、2002年4月研究棟Aの7階でスタートし、2003年研究棟Cの6階に当初の5倍のスパン総床面積319.1m²を取って移転し、現在に至っています。

CDB図書室の設置概念は、執筆環境として閲覧席を重視した研究者数に見合うスペースの確保と、

電子資料を中心とした迅速な情報提供です。図書室の入り口は2ヵ所あり、閲覧室か複写・印刷コーナーへ入れます。研究者中心の図書室のためBDS設備は設置されていません。閲覧室入り口から入ると、右手に新着雑誌架が並んでいます。閲覧室の机は面積が広く脇机もあり情報コンセントも備え仕切り板もあり、研究者の創作活動にふさわしい設備です。閲覧室の左手には図書書架があり、参考図書があります。部屋の壁側には貴重図書書架もあり、発生学を中心とした図書をコレクションされています。図書書架の先には貸出デスクと、電子ジャーナル等閲覧用のPCが3台あり、その先ガラス張りの部屋の中に事務室があります。事務室を通り抜けると、もうひとつの入り口からもすぐに入れる複写・印刷コーナーがあります。研究発表の支援のため、A0版プリンターと大容量PC・フルカラー複写スキャナ複合機・簡易製本機等が置かれています。部屋の奥には集密式書架があり、製本雑誌等を収めてあります。



閲覧室

職員が直接対応する開館時間は平日の午前9時から午後5時20分までです。それ以外の時間帯は無人入館システムにより利用でき、資料の貸出も出来ます。利用対象者はCDBの関係者に限られています。図書資料1,700冊、雑誌106タイトルを持っておられ、理化学研究所サイト全体で約3,000の電子ジャーナルを利用できます。図書館システムは専門図書館に広く導入されているシステムラボ製の図書管理システムLXシリーズで、NIIのCAT/ILLシステムにも参加されています。また利用者用インターフェイスに、文献情報データベースから電子ジャーナル等へナビゲートできるSFXを導入しており、これらは研究室内からもLAN経由により利用できます。外国人研究者受入のための日英両言語への配慮、研究者の約半数が使用されているMac PCへの配慮も図書室の大きな役割です。図書室のホームページは研究所内にもみ開放されており、OPAC・SFX等のサービスの提供により、研究者のための支援活動を常に心がけておられました。

(宮本)

書評

笑う！遺伝子；笑って健康遺伝子スイッチON！

村上和雄 著 一二三書房 2004年

高井真司



「笑い」と「科学」、一見、無縁のように思うこの2つのテーマを真正面から結びつけ、そして、それを社会へ還元しようという、大きな構想が描かれている本である。最近、吉本興業が「笑い」で病気を治療する研究を行っていることは、マスコミ等でご存じの方も多いと思うが、その企画が決して不真面目でないのが痛快で面白い。

本書は、「お笑いと言葉との出会い」、「笑いは笑い事ではない」、「笑ってオンになる遺伝子メカニズム」、「スイッチオンの秘訣」、「笑いと言葉の関係が見えてきた」という5つのテーマについて、科学者である村上氏と吉本興業の横澤氏の対談を織り交ぜて構成されている。著者の村上氏は、「レニン」という高血圧の原因遺伝子や「イネゲノム」の全遺伝子の解読など、遺伝子工学の分野において著名な科学者である。一方、横澤氏は、「ひょうきん族」や「笑っていいとも！」などの超ヒット番組を手がけたバラエティーの魔術師である。この二人に共通していることは、何よりも固定概念に囚われないということ、そして、実現化することかもしれない。

村上氏は、「スイッチオン」という言葉を多く使用している。村上氏によると親から受け継いだ私たちの遺伝子のうち、常に「オン」になって働いているのは、全体の3%程度だそうだ。つまり、残りの97%は眠ったままで、その眠っている遺伝子の中に病気を治療してくれる遺伝子があり、それを「笑い」で「スイッチオン」にできるのではないかと、というのが彼の仮説である。一方、逆に、

ストレスなどにより、良い遺伝子が「スイッチオフ」にもなることもあるらしい。彼が初めに行った実験は、糖尿病患者を対象に2日間行った。1日目には食後に大学の「講義」を、そして、2日目にはお笑いコンビ「B&B」の「漫才」を聞いてもらい、血糖値の変化を解析することであった。どうも、大学の講義は、「退屈」(ストレス?)の代表として実験に用いられたみたいである。その結果、「講義」と「漫才」では、食後の血糖値の上昇に大きな差があり、漫才を聞いた後では確実に血糖値の上昇が抑えられていたという。村上氏は、「笑い」が眠っている良い遺伝子の「スイッチオン」の役割を担い、そして、結果として血糖値の上昇が抑えられたと結論づけた。単純な結果考察のように思うが、この実験結果をまとめた論文は「Diabetes Care」(インパクトファクター: 7.501)に掲載され、そして、日本のみならず「ワシントンポスト」「ニューズウィーク」などにも取り上げられ、一躍、「笑い」と「科学」を結びつけたのである。

「笑い」についての研究は、古くは古代ギリシャ時代、プラトンやソクラテスといった哲人が「笑い」について言及し、その後も21世紀に至るまで、デカルト、ニーチェなど数多くの哲学者が「笑い」についての論文を書いているそうである。しかし、「笑い」で治療まで考えたのはおそらく村上氏が初めてではないだろうか。画期的な発想である。村上氏によると、実際に機能している遺伝子はたった3%、そして、遺伝子レベルで見れば、ノーベル賞学者もそこいらのおじさんも99.99%同じだそう。つまり、如何に眠っている遺伝子(残りの97%)を起こさせるか(「スイッチオン」)が重要と考えていたそうである。その有効な手段として、「環境変化」や「努力」を彼の米国留学、筑波大学の頃のエピソードを交えて紹介している。しかし、「環境変化」や「努力」というのはそう簡単なものではなく、吉本興業との出会いが、彼に新しい学説、万人に可能な「笑い」による「スイッチオン」を導き出したのである。

現在、この「笑い」の研究は、経済産業省の予算で「大東ダイナミックプロジェクト」として進んでおり、そして、将来的には、薬の変わりに「漫才」のビデオを患者に処方することも考えているそうである(当然、特許は吉本興業?)。本書では、遺伝子の成り立ち、生命の神秘についても非常にわかり易く解説してくれていますので、生物学の勉強としても是非ご一読あれ。

(たかい・しんじ 薬理学助教授)

本学教職員著作寄贈

勝岡 洋治 (泌尿器科学)

前立腺肥大症日常診療マニュアル 改訂第2版/勝岡 洋治他訳 医学図書出版 2005

前立腺特異抗原 (PSA) 改訂第2版/勝岡 洋治他訳 医学図書出版 2005

太田 富雄 (名誉教授)

脳神経外科学 改訂9版/太田 富雄他編 金芳堂 2005

中島 正之 (眼科学)

目の病気がトータルにわかる白内障・緑内障治療とケアQ&A

/中島 正之編著 ミネルヴァ書房 2005

河野 公一 (衛生学・公衆衛生学)

コア・ローテーション地域保健・医療/予防医療/河野 公一他編 金芳堂 2005



1. 今日の診療Web版を導入しました。

平成17年4月1日より「今日の診療Web版」を導入しました。図書館のhome pageからaccessしてください。利用に際しては、利用者IDとパスワードが必要です。

2. SCOPUSデータベースを導入しました。

Elsevier社の作成した世界最大のデータベース「SCOPUS」を導入しました。図書館のhome pageから利用できます。

3. メディカルオンラインを導入しました。

平成17年4月1日より国内の医学文献の全文が入手可能な「メディカルオンライン」を契約

しました。図書館のhome pageよりaccessしてください。なお、利用に際しては、年間論文ダウンロード数に制限がありますので、必要最低限の利用をお願いします。

4. 卒業生から図書が寄贈がありました。

平成16年度卒業生より下記の図書が寄贈されました。

ロビンス基礎病理学 第1巻 他 10冊 計90,000円

5. IDカード（学生の場合は学生証）は、図書館への入館、資料の貸し出しの際に必要ですので、常に携帯してください。セキュリティの面からもカードの貸し借りは禁物です。

6. 図書館において皆様からお預かりした個人情報、図書館業務でのみ使用するもので、他の用途に転用することはありません。

7. 新規受入雑誌（看護専門学校）

緩和ケア（ターミナルケアの改題） 15（2005）＋

図書館業務日誌

平成16年11月

11日（木）医図協「国立ライフサイエンス情報センター」推進準備委員会（於、慈恵会医科大学）

12日（金）医図協理事会・評議員会（於、慈恵会医科大学）

15日（月）Ovidシステム講習会（於、図書館会議室）

17日（水）－19日（金）第11回医学図書館研究会・継続教育コースに館員参加（於、川崎医科大学）

18日（木）図書館運営委員会（於、図書館会議室）

19日（金）近畿地区医学図書館協議会例会（於、大阪歯科大学）

24日（水）図書館将来計画検討委員会（於、図書館会議室）

12月

8日（水）丸善関西図書館セミナーに館員参加（於、阪急グランドビル）

9日（木）NII大学図書館等関連業務説明会に館員参加（於、キャンパスプラザ京都）

15日（水）国際セミナーに館員参加（於、国立国会図書館関西館）

16日（木）Ovidシステム説明会（於、図書館会議室）

平成17年1月

18日（火）図書館将来計画検討委員会（於、図書館会議室）

20日（木）図書館運営委員会（於、図書館会議室）

28日（金）医図協「国立ライフサイエンス情報センター」推進準備委員会（於、慈恵会医科大学）

2月

18日（金）医学情報処理センターUser会（於、第2会議室）

22日（火）図書館将来計画検討委員会（於、図書館会議室）

25日（金）医学情報処理センター運営委員会（於、センター会議室）

3月

9日（水）大学コンソーシアム京都図書館職員講演会に館員参加（於、同志社大学）

11日（金）EBSCOセミナー2005に館員参加（於、ヒルトン大阪）

16日（水）医図協分担購入参加館会議に館員参加（於、日本医科大学）

17日（木）図書館運営委員会（於、図書館会議室）

編 集 後 記

今回のトップ記事は、南 敏明教授にお願いしました。また、エッセイは、岡田仁克先生に執筆して頂きました。21世紀の医療環境のシリーズは、17回目になります。

今号は、年度当初にあたりますので、図書館の利用統計等を掲載しました。その他、多くの方に執筆して頂き、有難うございました。表紙のカットは、北村達郎氏に描いて頂きました。読者の方の投稿を歓迎いたします。（茂幾）

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.28号 2005年6月6日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (072) 683-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社